全裸勇者番外編

瑞希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全裸勇者番外編

【Ｎコード】
Ｎ３３７１ＢＡ

【作者名】
瑞希

【あらすじ】
男の子ってどうやらここも弱いみたい。
女の子のいわゆるビラビラに該たる部分がくっついた時に出来たものみたい。
線に沿って舌を這わせながら、竿をしごいてあげるとあっという間に――
ってこれ、
あらすじじゃなくて、たますじじゃない！
あの二人が再び帰ってきた！

今回はミーシャ達が砂漠に迷い込んでしまって……！？
全裸系冒険活劇どうぞ御笑覧あれ！

※ブログと重複投稿しています。

砂埃で痛む目で空を見上げてみる。雲一つない一面の青が広がっていた。
そしてその真ん中には恨めしいまでに明るく輝く太陽。まるで永久機関の魔法装置の如く、灼熱の光を無慈悲に放射し続けている。
鉛の様な重たい足を、引きずる様にして一歩前に出す。
靴の下で細かい砂粒が乾いた音をたてた。もう何時間も私の足裏はこの無機質な感触しか味わっていない。
勇者様――
私の隣でふらつきながら歩いていた彼に声をかけようとしたが、喉が乾ききっているために言葉にならなかった。
勇者様は衣服を纏っていない分、私よりも消耗が激しそうである。
どうしてこんなことになってしまったんだろう――

――

「勇者様、最近少し背が伸びたんじゃありません？」
「そうかな？」

少し肌寒い岩山を歩きながら、何気ない会話を交わす。
旅に出た当初は勇者様の方を向くだけでも逐一緊張していたのだけれど、今ではすっかりフランクフルト丸出しの勇者様とフランクな仲になってしまった。
魔王サンゲドスを倒した私達は、その後再び大陸を放浪する旅に出ていた。
私には故郷の村へ帰ると言う選択肢もあったのだが、結局勇者様に着いてきてしまった。
どうやら魔族側にはサンゲドス以外に四覇帝と呼ばれる三匹の魔

王がいるらしい。
こやつらを倒さねば人族に真の平和は来ない……のだが、ここから先どこへ行けばいいのか？手がかりが全くないのでわからない。
とりあえず新しい大陸に渡るために、あちこちふらふらしつつ港町を目指そうということになったのだった。

「ええ、初めてお会いした時よりも少し伸びてますわよ」

ちんこは変わってないけどな。

「自分では全然気付かないなぁ」

そりゃ全裸だと最近服がきつくなったとかないもんね。

「ミ、ミーシャも女性らしくなったんじゃないかな」

突然勇者様が頬を亀頭の様にピンクに染めて、柄にもないことを言い出した。

「まぁ、本当ですか！お世辞じゃありませんの？」
「いや、本当だよ」

……何気によく見てるなこいつ。
実は、最近旅に出た時からずっと穿き続けていたパンツが最近小さくなってきて、歩いているとお尻に食い込んできて困っていたのだ。
勇者様が見ていない隙を見計らって素早くスカートに手を突っ込んで食い込みを直しているのだが……
根本的な解決には至っていない。
それにしても、どうやらお尻は順調に育っているみたいなんだけ

ど……
問題はお胸の方でして。
こっちはさっぱり育ってる様子が見られないのよねぇ。ローブがきついとか全然ないんだもん。
むしろお腹の方がきつくなってきてる様な……
いや、これ以上考えるのはよそう。
あーあ、本当に悩ましいなぁ。そりゃ世界平和も大事だけどさ、年頃の女の子にとってはそういうお肉の付き方の問題の方が切実なのよねぇ……
はぁ、なんだかおちんこ、いやおちこんで来ちゃった。
こういう時はお買い物で気分転換に限るわよね。そうだ！次の街に着いたら新しいパンツ買っちゃおっと！
けど、新しいパンツ買ったら今まで穿いてたパンツどうしようかしら。
多い日も、遅れてて処女の癖にちょっと焦った日も、共に死線をくぐり抜けてきた戦友だもの。捨てるのはちょっとねぇ……
そうだ！勇者様に穿かせるってどうかしら！完璧なリサイクルじゃない？これ。
……いや、でも勇者様に穿かせてサイズがブカブカだったらもう立ち直れない程の精神的ダメージを喰らってしまいそうだ。
そ、それに私のパンツにこびりついている多種多様な分泌液によって出来た染みが勇者様のおちんちんとくっつきあうのかと思うと……
興ふｎ、いや恥ずかしすぎる。やっぱり捨てよう。異教徒の街で火葬供養してもらうか。
ここ最近人気の無い辺鄙（へんぴ）な地域をずっと旅しているので、もう何日もお風呂に入ってないのだ。私のお股は今相当不味い状況になっているに違いない。きっとそれは勇者様も同じだろう。
あぁ、においフェチの私としては異臭を放つおちんちんと言うのもそれはそれで……

「ミーシャ、敵だ！」
「はっ、はいっ！」

魔物の奇襲攻撃に慌てて戦闘態勢に入った。
あっ、急に動いたらお尻だけじゃなくて変な所にもパンツが食い込んできちゃったよぅ／／／／／
内股になってモジモジしてしまう。

「危ない、こっちだ！」
「はうぅ！」

勇者様に強引に引っ張られてパンツの食い込みが一層引き締まる。
軽く絶頂を迎えてしまって思わずエッチな声が漏れた。
やばい、お股に感度が集中して魔法力の制御が……
今魔法を発動させたら赤ちゃんが産まれる穴から出てきそうである。処女膜が破れちゃうじゃない！

「どうも魔族の住処に入り込んでいたようだな」

魔王を倒して以降、魔族に人里が襲われることはほとんど無くなった。
しかし魔族がいなくなった訳では無い。
森林や山岳地帯など人が近寄らない所に彼等はまだ潜伏しているのだ。
四覇帝が蜂起の命を発すればたちどころに禍々しい煉獄の騎士と化すだろう。

「この地の主よ！現在魔族と人族は休戦中である！我々はここをただ通り抜けたいだけだ！無益な争いはやめにしないか！」

神話に出てくる鳥人の様な姿をした魔物にそう叫んでみる。魔族とは言え、出来ればいらぬ殺生は避けたいものである。

「貴殿の縄張りを侵したことは謝る！しかし我々に敵意はない！どうか見逃してもらえぬか！」

勇者様もラブ＆ａｍｐ；ピース全開の無防備な格好で和睦を申し出た。その格好で敵意がないと言うのは中々説得力があるな。向こうが勇者様が全裸ってことがわかってればだけど。

しかし――

「人族ハ信用デキヌ――」

魔物は冷酷にそう言い放つと、自己の翼から羽を引き抜き、ほとんどノーモーションで私に投げつけてきた。

「ぐっ！」

投げられた羽が私の肩口に刺さる。軽い痛みと共に物凄い脱力感が身体を襲った。

「こ、これは……」

「どうした？」

「魔法が……使えない」

「なんだって！？」

魔法を発動させようとしても魔法力が集まらない！

慌てて羽を引き抜こうとするが、まるでパンツの如くがっちりお肉に食い込んで抜けない。

これは……羽に封撃系魔法が込められているんだ！
魔法を封じられてしまうと私なんぞお尻が重たくて運動能力平均値以下の女の子でしかない。戦闘には全く役立たずである。
翼を持つ魔物に対して近距離攻撃主体の勇者様だけでは圧倒的に形勢不利。

「やむを得ない。ここはひとまず退却！」
「あふんっ！」

勇者様が私の手をとって走り出した。
魔物は空を飛びながら追跡してくる。
そして私はと言えば走る度にパンツの布が柔肉に食い込んでいって、スカートの中はもはやTバック状態である。
ほとんどヒモ状になっているパンツが勃起した突起を過激に刺激。
電流の様な快感が背中から後頭部に掛けて絶え間なく流れていく。
ああ、もうどうなってもいいや。戦闘中なのに欲しくてたまらなくなる。

「くっ、行き止まりか！」

いつの間にか私達は崖っぷちに追い込まれてしまった。魔物は悠々と飛びながら私達を見下ろす。
切り立った崖の下は深くて見えない。これは落ちたら不味い予感。

「衝撃系魔法――超振動（ブレイド）」

魔物が空中で手をかざした瞬間、魔法が発動。分子レベルで物体を破壊する超振動が、私達の足下の岩を粉々に破砕する！

「うわあああああああ！」

足場を失った勇者様と私は、為す術もなく崖を転がり落ちていった――

「下が柔らかい砂地で助かったな」

急崖からころげ落ちた私達を待っていたのは一面に広がる砂漠だった。

肌寒い位だった山と違ってここは異常に暑い。

「勇者様。お怪我は？」

「私は平気だ。君は？」

「私もなんとか」

「その羽はどうしてもとれないのか？」

「はい……この手の魔法は術式者からある程度離れれば効力が失われるかと思いますが」

「そうか。ならばこの山からすぐに離れよう。もう元来た道には戻れそうにないしな」

勇者様が急崖を見上げる。よくこんな所を転げ落ちてきて助かったものだ。

「しかし参ったな。私もあちこち旅してきたが砂漠というのは初めてだ。大陸は本当に広いな」

「それでも、とにかく進むしかありませんわね」

最初から安全な旅だった訳ではないのだ。腹を括るしかない。

そう覚悟を決めて、無限に広がる黄色い絨毯の上を歩き始めた。

――

砂漠というものを甘く見ていた――
意気揚々と歩き出したのも束の間、すぐに私達は砂漠の洗礼に根をあげてしまう。
ほんの数時間程度歩いただけで二人とも熱射病と脱水症状を起こし始めていた。歩き始めた当初吹き出ていた汗もいつの間にか止まっている。

「本当に暑いな……」
「摂氏四十度を超えていますわ」
「そう言えば君は大地の精霊と契約していて、温度がわかるんだったな」

勇者様のたまたまが史上かつて無い程弛緩しきっている。おちんちんもいつもの精気を失って、しなびた大根みたいになっていた。
暑さで頭がボーッとしてきた。後ろを振り返ると、転げ落ちた山岳の大きさが先程と大して変わってない気がする。随分歩いたつもりなのに……
実は人間というのは本当にまっすぐ歩くということが出来なくて、歩いている内に微妙にどちらかに偏っていってしまうものらしい。
砂漠のような何も目印になるものがない所では、まっすぐ歩いているつもりでもいつの間にか同じ所をぐるぐる回っているだけになってしまうということを私は後になって知った。

魔法さえ使えれば――
憎しみを込めて羽に手を伸ばすがやっぱり抜けない。あの魔物は相当の使い手だったみたいだ。
魔法力さえ健在ならば、水撃系魔法でとりあえず飲料水の確保だけでも出来たのに。
はっ！でも、パンツが食い込んでて魔法力の制御が出来ない状態

で水撃系魔法を発動させたら……
飲料水が私の赤ちゃんが産まれてくる穴から出てきて、勇者様がそれを飲むという神をも恐れないシチュエーションになるのでは……
やだっ、またお股がぬるぬるしてきちゃった。
ええい、身体中から水分が奪われてるってのに、どうしてここだけはしっかり濡れるんだ。
全く人体って奴は巧妙に造られている。いよいよやばいとなったら本当に勇者様にここを舐めてもらって水分補給してもらおうかしら。聖泉とか言う表現もある位だし。
――ってな具合に砂丘（さきゅう）で子宮（しきゅう）が疼きそうなことを考えていたら、不意にドサッという音が後ろで響いた。

「勇者様！」

とうとう勇者様が倒れてしまった。慌てて駆け寄って起こそうとしたが、魔法が使えなきゃ非力な上に、私ももう限界に近い。結局勇者様と一緒に私も倒れ込んでしまった。

「すまない。全く情けない限りだ。君より先に力尽きてしまうとは……」

まぁ、服着ないで直射日光浴び続けてればそうなるわな。

「人族最大の敵は魔族ではなく自然だったか……」
「ごめんなさい。私が油断して魔法を封じられてしまったばかりに……魔法さえ使えればこんな砂漠どうってことなかったのに」
「君が謝ることはない。私一人ならもっと昔にとっくに終わっていた旅だ」

一度倒れてしまうともう一度立ち上がろうという気力が失せてし

まう。今回ばかりは本当に助からないのだろうか。
隣で倒れている勇者様をじっと見つめてみた。
……ああ、ひからびているおちんちんとは裏腹に金玉ってこんな時でもたふんたふんしてるんだなぁ。
あの中って何が入ってるのかしら？ひょっとしてあれってラクダのこぶみたいに非常事態用の栄養素が詰まっているのでは？
私が教会で読んだ書物にはなんて書かれてたかな……
そうだカルピス！
たまたまの中に入ってるカルピス飲ませて欲しいのぉ、みたいなことが書かれてた気がする。
カルピスと言えば確か異教徒が飲んでいるらしい乳製品。
乳製品なのに玉の中に入っているとはこれ如何に。
これ如何にと言えば、書物には確かイカ臭いって記述もあった気がする。
乳製品なのにイカ臭いというのはこれはいったいどうしたことなのだろうか。
うーん、摩訶不思議。こうなると一度飲んでみないことには死ねないなぁ。
どうやって飲むの？どこから出てくるの？
……などと生気を失いかけてる時に性器のことばかり考えていたら、いよいよ今までの人生が目の前に
次から次へと劇画の様に浮かんでは消え浮かんでは消え……
ってなんかおちんちんしか浮かび上がってこないじゃない！私の人生おちんちんが全てかよ！
これじゃ走馬燈（そうまとう）ならぬ走マラ燈……
ところでマラと言えば古代に玉遊びの達人と呼ばれたマラドーナと言う偉人がいたらしいけど、玉遊びの達人なのに名前がマラ（笑）どーなのそれ？
……死の淵に際して私はナニ、いや何を考えているのだろう。

「こんな所で志を断たれるとは……残念だ」
「まだ諦めてはいけません！」

そうだ、まだ諦めてはいけない。何か助かる方法があるはずだ。
何か、ナニ……
はあああああああ！
勇者様のナニが、明らかに重力に逆らった不自然な方向に曲がっているっ！
これはまさか、まさか……

「ゆっ、勇者様！立ち上がって下さいませ！」
「しかし……もう体力が」
「そこをなんとか！最後の力を振り絞ってでも！」
「そう、か……何か一筋の光明を見いだしたのだな。ならば！」

勇者様が自分の膝に手をつきながら立ち上がった。
刹那、勇者様のひからびたおちんちんがまるで何かに引っ張られるように取り舵の方向に折れ曲がっていく。

「勇者様！左です、左へ歩いて下さい！」
「こうかい？」
「今度は右！」

やっぱり！勇者様のおちんちんは明らかにある一点を指し示している！
古代、鉄の棒を使って地下水や貴金属の鉱脈を探り当てる技術があったと言われている。
しかしこれは悪魔の仕業であると時の正十字教会から異端の疑いをかけられ、このテクノロジーは封印されてしまったらしい。
敬虔なる正十字教会教徒である私が本来悪魔のものに頼るのは御

法度なのだが、勇者様のモノに頼るのなら神様も許してくれるだろう。使ってるの鉄棒じゃなくて肉棒だし。
この技術の名前はなんていったかなぁ……
そうだダウジング！
向こうがダウジングならこっちはさしずめダウチングだな。いや、もうフルチングでいいや。
それにしてもおちんちんにこんな機能があったとは……
まだまだ知られざる秘密がたくさん隠されているのね。
おちんちんの秘密を解き明かすまではまだまだ死ねないな！

「あっ、そこです！そこ！」

別に感じるスポットを集中的に責められた訳ではない。
先の方がちょっとだけ曲がっている状態がデフォの勇者様のおちんちんが、これ以上無いと言う程まっすぐ真下に向いて伸びているのだ！
勇者様のおちんちんは姿勢の悪さで損してるわね。
まっすぐに伸ばせば中の下程度の長さはあるのに、ひん曲がっているせいで短小な印象を与えてしまう。実際の１／３くらいの大きさにしか見えないんじゃないの？
１／３の短小な印象。なんちゃって。ごめん、それが言いたかっただけです。

「うおおおお！」
「ミ、ミーシャ？」

勇者様のおちんちんが指し示す地面の一点を最後の力を振り絞ってがむしゃらに掘りまくった。
柔らかい砂の大地は土よりも掘りやすいものの、それでも掘っていく度に段々指先に血が滲んできてしまう。

痛みと共に手の感覚が鈍って、指に力が入らなくなっていった。
魔法さえ使えればこんなの何でもないのに、あと少しなのに……

「私に任せろ。君は少し休んでいたまえ」
「勇者様……」
「よくわからないが、ここを掘ればいいんだな？」

男の子が『掘る』とか言う台詞を使うといけない妄想が掻き立てられて興奮してきちゃう……

「君には私には見えないものが見えてるんだろう。それでこれまで何度も助けられてきた。今回もそれを信じるだけだ！」

いや、私には見えないも何も、自分にぶら下がってるモノを見てるんだけどな。
男子は自分のモノ自分で見ること出来るじゃない！女の子は本当に見えないんだからね！
流石勇者様は力があってどんどん砂が掘り返されていった。
やがて勇者様の上半身がすっぽり隠れる程の穴になり、地上に露出しているのは勇者様の足とお尻とその間から覗く玉とおちんちんだけに……
凄いパワーだ。まるで工房都市にあるドリルという工作機械みたい。
そういえば勇者様のおちんちんの先ってドリルみたいな形してるわね。

「むっ！」

さらに深く掘り進んで足の先の方までしか見えなくなってしまっていた勇者様の動きが止まる。

刹那、地面から不気味な低重音が響き渡ってきた。
何？音だけじゃなくて心なしか地面が揺れている様な……

「うわあああああっ！」

勇者様が叫ぶと同時に私の前に巨大な水柱が吹き上がった。
それに飲み込まれて勇者様も一緒に空中に持ち上げられた。
どうやら見事巨大地下水脈を掘り当てたらしい。
灼熱の太陽に照らされて舞い落ちてくる水滴がキラキラと輝いている。
無意識の内に私は口を大きく開けて、落ちてくる水滴を飲み込んだ。
故郷の村で雪が降ってくると、口を開けて舞い散る雪を食べていたのを思い出す。

「美味しい……」

水がこんなにも美味しいものだったとは。
本能が大きく喉を鳴らして降り注ぐ水を胃に流して込んでいく。
大量に流し込まれた水はすぐに吸収され、乾ききった細胞に浸透していった。
助かった――
目の前に吹き上がる透明の柱を見ていると、まるで鯨の潮吹きみたいに見えた。
潮吹きかぁ、私が教会で読んだ書物によれば凄い気持ちいいらしいのよねぇ。
古代異教徒の中に女の子の潮を吹かせる達人がいたと言われている。
『黄金指の鷹』と言う二つ名が与えられていたらしいけど……
そんな指で掻き回されたら私の地下水脈からこんな感じに盛大に

吹き出しちゃうのかしら。
やだっ、とりあえず命が繋がったとなったら、もう性欲が旺盛になってきちゃった。ほんと私ったらいけない子。
喉が潤ったら今度は水浴びしたくなってきちゃったな。何しろもう何日もお風呂には入れなかったから……
はあああああっ！
その時脳裏に激震が走る……！
何日もお風呂に入ってないのは私だけじゃなく勇者様も一緒であり、今私が飲み込みまくった水は一緒に吹き上がった勇者様が全身に浴びている水な訳で、当然何日も洗っていない勇者様のおちんちんや股ぐらがたっぷり浸かっている訳で……
ん？
口の中に違和感を覚えて指を突っ込む。違和感の元になっていた異物を指で掴むと何か細くて長い物体……
つまみ出してみると、それは金色の毛だった。しかもちぢれている……
これは、これはあああああ！
やっぱり勇者様のチンｇｅ……
その時吹き上げられていた勇者様がようやく落ちてきた。

「ミーシャ、助かったね！やっぱり君は凄いよ！」
「……うっ――」
「ミーシャ？」
「うぐぅおえええええええ」
「どっ、どうしたんだー！」

女の尊厳などお構いなしに、勇者様の目の前で酸味の効いた汚物をぶちまける。
においフェチの私であってもこのプレイは流石にきつかった。
いきなりごっくんはまだちょっと無理です。

新しい街についたらどうやらパンツだけでなく、ローブも買い換えなきゃいけないみたいだ。

（後書き）

新作長編を書いていたのですが一向に上手くいかないのでついカッとなって全裸勇者の短編を書いてしまいました。もう連載が終わってから４ヶ月位経ってたのですね。

それではまたご縁があればお会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3371ba/

全裸勇者番外編

2012年1月8日19時48分発行